

## ものとは何か

甲「先生、私は宗教など人生にはいらぬものだと思います。」

乙「なるほど……………」

甲「現代の科学的教育を受け取った俺たちには、宗教など持つということが一つの侮辱であり、愚かさだと考えます。」

乙「なるほど……………」

甲「だいたい、仏だ神だと言ったところで、それは人間の観念の遊戯であつて、幻を喜んでゐるのにすぎないのです。とくに死後の浄土を願つて、この世をその浄土へとやらの準備のごとく考へてゐることなどがまったく間違ひです。」

乙「なるほど……………」

甲「俺たちは人間は死んだら消えて無くなることを信じます。」

乙「なるほど……………」

甲「いったい先生はこんな時代に仏教など説いていて、不安を感じはしませんか。」

乙「いや別に……………」

甲「私はさつきからあれほど反宗教的なことを言つてゐますのに、あなたは、なるほど…………… いや別に…………… それのみくり返しておられますが、いったいどうしたのです。」

乙「しかしそれはおかしな言い分ですね。私はあなたのその明快な断案を謹聴してゐたのです。あなたの意見を、見識を拜聴してゐたのです。ずいぶんあなたはもの知りですね。」

甲「そう言われるとちよつと、その、困りますが……………先生、何とか言つてくださいませんか。」

乙「おかしな人ですね。あなたは、はつきりとしたご意見なり、人生に対する断案を持つてゐられるのだから、私こそ聞かしてもらつてゐたのですに……………いいとか悪いとかいうより、あなたの勇敢な明快な結論を。」

甲「私は哲学、とくに唯物論が唯心論より正しい、そして勝れたものだと考えますね。」

乙「唯物……………物とは何ですか。」

甲「もの……………ものとは物質です。」

乙「物質とは何ですかね。」

甲「物質とは……………??……………」

乙「ハハハ……………あなたは、物質ということをよくは知らずに言つてゐますね。」

甲「……………」

乙「唯物論と言へば『物』について知つておかねばいけないじゃありませんか。ここに一つのコップがある。これはたしかにもののである。このコップを槌でも何でも打ちくだいて、ついにいかなる方法（物理的）でもなし遂げられない所までゆくと、そこに極微粒を想像することができると。学者はそれを分子と名づけました。物質は分子からできている。ところが、化学的方法を使つてさらにこれを選りすれば、

ついに物質は、原子とすることができると。この原子こそ物質の正体である。ここに水がある。水は分解されると、化学の一頁を学んだ者はだれでも知っているように、 $H_2O$ すなわち酸素（O）一原子と水素（H）二原子からできている。この原子説は、英国の現代科学の功労者、ジョン・ダルトンが最初の主唱者であったように聞きました。今日化学研究発達の結果、原子の数は、八十有余あることが明らかになったそうです。ところが最近に至ってさらに電子論が新たに出てきて、物質は電子である。電氣的勢力である。しかしその電子とは何か、それは未知であつて答えられてありません。さらに、もと太陽と地球との間は真空であつて何ものもないといわれていたのが、それならば太陽の熱と光はいかにして地球に至るのか、ここについて宇宙には何ものかが存在せなければならぬというので研究の結果、米国の物理学者ミツチエルトン教授およびデイトン・ミラーは、エーテルの存在を証拠だてた。エーテルはいかなる所にも存在する。つまりエーテルは終極存在である。しかしそのエーテルの性質いかんとなればこれも電子同様わからないのであります。……つまり人間の力はついに最後にはこの知ることのできないものを仮定しなければならぬのです。」

甲「唯心論の帰結はどうなります。」

乙「唯心論から進んでもその最後には、實在論などになつて、宇宙の根本本態は何かの問題になります。唯物論でもその最後は宇宙の根本は何であるかに至つてついに、勢力一原論にまで到達しようとしています。私どもは学者に聞いても、ここまでしか言つて聞かされません。宇宙はいつたい何によつて成立しているのか。」

甲「仏教では何と申すのですか。」

乙「仏教では、色心不二と申して、色は物質、心は精神、物と心とは不二、すなわち二つはないというのが根本の見方です。そこで宇宙万有は真如の顕現である。この生滅転変の万有の本質を真如、あるいは一如と言ひ、あらゆる時間、空間、色、形をはなれたものである。この万有の本然態が、縁にふれて現象をおこし、天は高く、地は低く、大波小波、雪月花、柳は緑、花は紅と、このありのままなる妙現象を生ずるといふのであります。この考え方を真如縁起論と言ひます。この全一なる、普遍なる、平等なる真如をさして、法性、法身の仏と申すのであります。この平等一如の真如をさとする智こそ、阿耨多羅三藐三菩提——無上正徧智であつて、釈尊の体得なされた世界であります。」

甲「何だかおもしろいと思ひます。」

乙「釈尊はこの平等一如をさつたのですが、しかしその思想が大乗的に發展してきますと、釈尊がただ仏陀、覚者として生きられたというのみでなくて、その背後にいわゆる本覚思想を生みました。すなわち法華經の壽量品の思想で、釈尊は俺は地上に生まれて地上で滅する仏でなくて、じつに、塵点久遠劫の仏である。一切の生滅を超えて實在することを宣言します。久遠実成阿弥陀仏というものもそれであります。いわば人間悉多太子をして仏陀たらしめた、法性法身であります。花の背後の春のごとく、釈迦ならざる釈迦、幾多の仏を生み出す根本であります。人格の人

格であります。仏教のなかに釈尊を本尊とするのがありますが、あれはじつにこの久遠の釈迦にほかなりません。」

甲「しからば、その釈尊とあなた方がよく言われる阿弥陀仏とは、どんな関係がありますか。」

乙「なるほど……それを語りましょう。」